松沢研究奨励賞受賞者　研究報告

どの子も投げる楽しさを味わえる授業作りを目指して

陸上運動「投の運動」の実践

教育人間科学部学校教育課程保健体育科　H16 年３月卒

川崎市立西菅小学校　教諭　吉田　啓

１　研究の概要

> 児童の投能力の低下傾向が引き続き深刻な現状にあることを鑑み、遠投能力の向上を意図し「内容の取扱い」に「投の運動（遊び）」を加えて指導することができるようにした。遠くに力一杯投げることに指導の主眼を置き、投の粗形態の獲得とそれを用いた遠投能力の向上を図ることが主な指導内容となる。

小学校学習指導要領・体育編に上記の記載があり、児童の遠投能力向上のため、新たな運動領域が「加えて指導してもよい」とされている。

そこで、発表者が所属する川崎市立小学校体育研究会・多摩支部では、令和３・４年度の２年にわたり、本領域について実践し、場や用具の妥当性や、指導内容の系統性について研究することとなった。

２　研究テーマ

本研究ではテーマを「<u>どの子も投げる楽しさを味わえる授業作りを目指して</u>」と設定した。「遠くまで投げる爽快感」や「記録を伸ばしたり競争に勝ったりするために課題解決をする学びの深まり」など、投げることそのものとそれに伴う運動の楽しさを誰もが味わうことができるよう、場や用具、道すじなどについて実践・検証を進めた。

支部として令和３年度は１年生・６年生の実践を行い、令和４年度は７月に４年生、11 月に発表者が５年生の授業実践を行った。

３　研究の実践

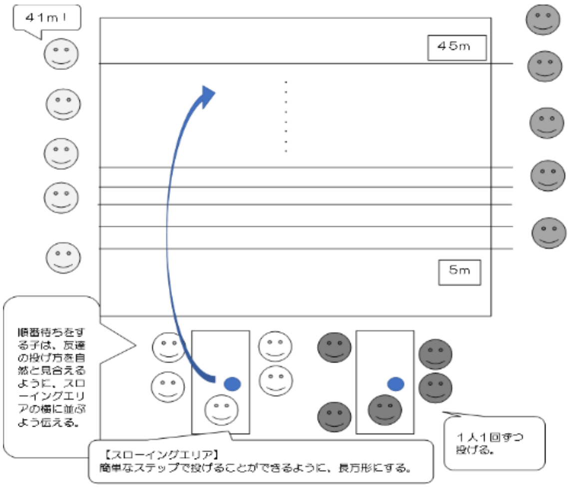
前述の研究テーマを受け、本実践ではめざす児童の姿を「<u>記録の向上を目指して、何度も夢中になって力いっぱい遠くに投げることを楽しむ子</u>」とした。

(1) 記録の向上を軸とした道すじ

投の運動に限らず陸上運動の楽しみ方には、競争と記録の２つの面があると考える。本単元では、高学年という発達段階も考慮し、記録の向上を図ることを授業の軸とした。自己の記録を伸ばすために必要な投のポイントを理解し、その点を修正・改善していくことで投げる楽しさを味わい、学習を深められるようにした。そのために、投のポイントに気付くことができるような場や自己の高まりを感じられるような場を工夫した。

(2) 記録計測の場

本実践では、扇形ではなく長方形で測定を行った。投球が左右にそれた場合ファウルになってしまうデメリットはあるが、その場合は投げ直しができるようにした。

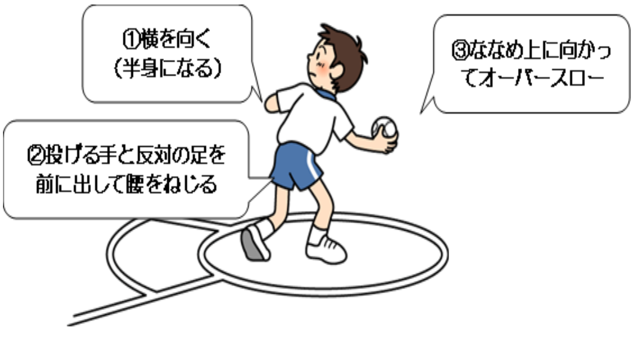


(3) 全員の記録を合計し、目標達成に挑戦する展開

児童が意欲的に取り組み、互いに助言したり、上手な友達の良さを見たりしながら学習に取り組めるよう、「全員の記録を合計して、目標に達したかどうか」という展開を考えた。前時の合計記録をもとに、全員の合計で目指す目標記録を設定し、毎時間その記録に挑戦していく。達成できたら次時にはさらに高い記録を目標として設定する。

全員の合計記録向上を目指すことが、「自分だけでなく友達の記録も伸ばすために学び合う」ことの必要感となることを意図した。また、合計記録なので、個人の記録を５ｍ伸ばすことは難しくても、１～２ｍ伸ばすことならば児童の抵抗感も少なく取り組めると考える。さらに、ミスショットで１本目より記録が悪くなっても、「友達にアドバイスを送り、友達に挽回してもらうことでクラスの目標に達することができる」と児童が考えられるように設定した。

(4) 動きのポイントの精選



「どうすればもっと遠くに投げられるかな？」「○○さんが遠くまで投げられるのはどうしてかな？」など気付きを促す言葉かけをして、児童と一緒に動きのポイントを整理していった。また、この３つのポイント以外の気付きも出てきた際は、教師がそのポイントの的確性を見極めて、一緒にまとめていくようにした。

(5) 動きのポイントに気付いたり、コツをつかんだりするための場の工夫

投げる楽しさを味わいながら、動きのポイントに気付き、投の能力の向上を図る場を設定した。令和３年度からの実践を通して、いずれの授業でも共通して取り入れ、成果を得られたのが「ワイヤーショット」の場であった。

校庭の国旗掲揚台にワイヤーをくくり付け、筒状に細工したボールを通して、ワイヤーが斜めになるように地面に固定した場である。

４　成果

「全員の記録を合計して、向上を目指す」という学習展開にしたことで、友達同士で自然にアドバイスをし合ったり、友達の好記録を喜び合ったりする姿が見られた。共に教え合ったり、学び合ったりすることができる学級の実態にも合った手立てであったと考える。また、本学級は20名と小規模で、尚且つ校庭も十分な広さを有しており、記録の測定を毎時間２回行うことができた。その記録についても単元１時間目と５時間目を比較して平均で２ｍ程度記録の向上が見られた。

ワイヤーショットの場を取り入れたことで、教師の考えた動きのポイントを身に付けることにつながった。半身になって斜め上に向かって投げる動きをどの子も習得することができた。安全面の理由から、校庭に常設することは難しいが、どの学年であっても効果が期待でき、授業実践の場や、児童の体力づくりの一環として活用を期待できる場であった。

本研究では検証していないが、投の粗形態を身に付け、投の能力が高まることで、ベースボール型ゲームやゴール型ゲームなど、他の領域でも児童の学びがより深まることが期待できる。

５　おわりに

本研究は学習指導要領に新たに加わった領域であり、まだまだ実践事例が少ないと考えられる。今後も新たな実践に挑戦していきたい。